

老年学 (Gerontology) の生誕

橋 覚 勝

1

老年に関する近代的研究の発展は、A. F. Lawton の示唆によって次のように3期にわけて考察することができる。

第 1 期	1880～1920	近代的研究の発端
第 2 期	1920～1940	geriatrics (老年医学) の発見と組織的研究の開始
第 3 期	1945以後	研究の発展拡充と gerontology の誕生

以上の区分の理論的根拠について、Lawton のいうところをさらに明快に考察するならば、19世紀にはいって ‘biology’ という言葉がはじめてとなえられたことによって、生物学と医学との限界が一応明確になった頃から第1期がはじまり、‘geriatrics’ という概念が L. Nasher によって提唱せられるにいたった頃までをいったものと考えられる。第2期の今世紀前半は、‘geriatrics’ として老年期 (Old age, senescence) の医学的考察が次第に組織的におこなわれ、その概念がようやく一般に周知せられるにいたった時期、そして第3期は ‘geriatrics’ から ‘gerontology’ へ展開した時期として、いわゆる老年病学または老年医学としてのみならず、老年学として心理学や社会学、法律学、経済学、人口学、社会福祉学などの社会科学もその研究の一環に参加するとともに、単に old age または senescence の研究から ‘aging’ の過程についての研究に拡大伸長するにいたった時期といえることができる。

W R. Miles は19世紀は senectitude の発見にあったといっているが、かかる senectitude の発見は、やがていかにして人間を老と死からまもることができるかということが考察されねばならないのであって、ここに aging という概念があたりしく登場してきたのではないかと考えられるのである。ただし N. Shock は gerontology の領域を次のようにあげているのである。

- (1) 老年人口の増加にともなう社会的ならびに経済的諸問題
- (2) 個人および集団における aging の心理学的側面
- (3) aging の生理学的ならびに病理学的基礎
- (4) すべての動物における aging の一般生物学的側面

なるほど17世紀, 18世紀は周知のごとく近代科学の興隆の時代であり, すでに占星術や錬金術を征服した天文学や物理学の近代的発達から出発して, Vesalius の解剖学, Harvey の生理学, Linnaeus の植物分類学など, 偉大な人物やその業績が一連のいわゆる生物学者の系統から続出した時代であった。かれらは生物の成長と衰頹の過程を種々語りながら, 動物の寿命とともに人間の生と死, そして長寿を科学したのであった。かくして自然および生命に関する科学を哲学から分離せしめようとしてつとめたのである。この点に関しては, Sir William Lawrence の 'On the Physiology, Zoology and Natural History of Man' (1819) があずかって力があったといわれる。かくして 'biology' という概念は, 上述のようによく S. T. Trevianus の 'Biologie oder die Philosophie der lebenden Natur' (1837) によって, はじめて導入せられたのであって, 生物学的認識は驚異的に成長するとともに, 生物学と医学との限界が次第に明確になったといえるのである。しかしなおしばらくのあいだは, Philosophie der lebenden Natur といい, また半面には生命の根源を細胞の微視的世界にもとめ, その変化をとりあげねばならないかぎり, その両者は錯綜重畳した周縁をもっていたにちがいがなかった。

注

- (1) A. F. Lawton, The Historical Development in the Biological Aspects of Aging and the Aged, The Gerontologist, Vol. V, No. 1, 1965, p. 27. この論文における Lawton の年代的区分はあまりに精緻すぎるので, 本稿では年代に弾力性をもたせておいた。その方が事実上よいのではないかと思う。
- (2) L. Nasher については後述を参照。
- (3) W. R. Miles. Human Personality and Perpetuity, The Gerontologist, Vol. V, No. 1 1965, p. 35
- (4) N. Shock, Trends in Gerontology, 1957, p. 1

2

Old age に関する科学的考察は, かく生物学と医学との混淆のうちに胚胎したのであって, その後の展開の機序は Lawton の示唆のように, 第1期より第2期をへて第3期の現代にいたると考えてよかろう。

第1期における生物学的考察の端緒を, われわれは T. B. Young の 'On Centenarians' (1965), E. Metchnikoff の 'The Prolongation of Life' (1910), C. M. Child の 'Senescence and Rejuvenescence' (1915) などにもとめることができるが, これらはまさに Brown-Séguard (1817—1894) らの示唆によるものであったにちがいない。半面また医学的考察としては, J. Schwalbe の編集による 'Lehrbuch der Greisenkrankheiten' (1909) がようやく公刊せられ, そしてこれら生物学と医学の両側面をたくみにとらえたのが, A. Lorand の 'Das

Altern' (1919) (英訳 — 'Old Age Deferred') であったと考えられる。さらにまた J. Que-
telet の蓋然性の研究や統計学的考察が、Weismann や Nagel のあたらしい生理学ととも
に、そして F. Galton の遺伝に関する統計的研究などが、老年の研究に寄与したことを特記
せねばならぬ。R. Pearl の 'The Biology of Death' (1922) のなかに解明せられた寿命に関
する考察は、Galton 以来の先蹤の流れをくんだものであろうが、実験生物学として生物学に
新風をもたらしたものにちがいない。あたかもこれと相前後して、St. Hall¹ の 'Senescence
—The Last Half of Life' (1922) が公刊せられたのである。

しかしここにとくに注意すべきことは、Brown-Léquard, Steinach, Voronoff らのいわゆる
若返り法に関する研究が、近來の内分泌機能と老生体または老化との関係についての考察を
挑発したとはいえ、前掲の第1期より第2期への過渡期において、老年の生理病理の研究の展
開を阻害したということは、まことに遺憾なきわみであったにちがいない。

さて Geriatrics という言葉は、L. Nasher が1916年に 'Geriatrics' という大著を公にし
たときから始まり (厳密に言えば同氏はすでに1909年に New York Medical Journal にこ
の語をもちいたといわれている)、その後1919年に M. W. Thewlis が同じく 'Geriatrics, A
Treatise on Senile Conditions, Diseases of Advanced Life and Care of the Aged' を物
した。(後述のように同氏は1946年にこれを改版した。)(アメリカの辞書には geriatrics と
いう言葉は1923年にはじめてあらわれたそうである)。

この類語はすでに前稿にのべたように、つとに G. Zerbi が 'Gerontocomica, Scilicet de
Senum Cure atque Victu'² (1489年)、さらに J. Floyer は 'Mèdicina Gerocomica, or the
Galenic Art of Preserving Old Men's Health'³ (1724年) という言葉として、それぞれ書名
にもちいたというから、一応さかのぼってそれらについて解説せねばなるまいと思う。Zerbi
の 'Gerontocomica' 云々を私なりに英訳すれば、'Gerontocomica, Concerning the Care
of the Aged and the Way of Living' となり、従って "Gerontocomica" は老年の保健衛
生ということになるであろう。ここにはその詳述は割愛せねばならないが、本書は所詮 Hippo-
crates の論述にしたがって、老年疾患の解説にはじまり、老化の原因や特性、人間の寿命と
占星術の影響、健康の管理と長寿の衛生、さらに巷間流行のにせ科学的な療法などが説かれて
いるという。そして最後にいたって、死の不可避なことゝが論ぜられ、ゝ老年は人間の避くべ
からざる運命であるが、その最後はさだかではないゝと告白し、ただ Galen 的構想にしたが
って、老年性変化をのぼすことができると論及している。Floyer の 'Mèdicina Gerocomica'
はその注釈的副題でもあきらかなように、老人の健康保持についての Galen 医術で、彼のク
ラシカルな学風は彼をしてつとに Galen の医学の讃仰者たらしめ、つねに青春保持のための
摂生を説いたということである。彼の著述がアメリカにおける老年の生理病理の研究に大いに
寄与したことは特筆すべきことだといわれているが、Thewlis が 'Geriatrics' の改訂版⁴
において、高年期の 'Hygiene' を論じたとき、'Gerocomia' と題して括弧におさめているの

も、あるいは偶然ではないも知れぬ。

注

- (1) St. Hall の 'Senescence' は心理学者の執筆になるものとしては最初のものである。老人観の文化史的考察、人口統計における老年人口の問題、医学的、生物学的側面よりの考察などを概述し、さらに心理学的側面からは簡単な質問紙法による検討をほどこし、最後に死の心理を描述している。500ページに余る大著であるが、心理学的研究はきわめて貧弱である。しかし筆者の研究の発足に対しては唯一好個の手引書であった。
- (2) (3)については、前稿 '老年学の源流' のなかでいささか詳述したから、ここでは重複するのであるが、Thewlis の 'Gerocomia' に連関してふたたび簡単に記述したことをことわっておく。
- (4) M. W. Thewlis, 'The Care of the Aged' (Geriatrics) 1946の第2部第5章が 'Hygiene (Gerocomia)' と題されている。なお氏はこの第2部を 'Geratology' と題し、これは Science of the phenomena of decadence であるという。一般的用語としては現在本稿や既稿のように gerontology という語が用いられ、geratology という語はほとんど用いられていない。畢竟同義語であろうが、語源的には前者はギリシャ語の geron(old man) から、後者は geras (old age) から造語せられたものと考えられる。

3

Aging という概念は、1937年にアメリカにおいて 'Club for Research of Aging' が結成せられたとき、はじめてあらわれたのではないかと思う。これは基礎医学、生物学、心理学の分野における専門家が一堂に会して、老年期に関する研究のみならず、ひろく aging の過程について科学的に考察せんとするクラブ的な団体であった。そしてこの基盤のうえに Gerontological Society が結成せられたのが1944年であって、このとき gerontology という言葉がはじめてとなえられたのであった。この society は毎年1回総会をもつとともに、その成果を発表する機関誌 'Journal of Gerontology' の発刊を企画し、1946年1月より創刊することになったのである（最初は季刊、その後隔月刊となった）。すでにアメリカでは1940年に 'Geriatric Society' が組織せられ、上記 Journal of Gerontology の発刊と時を同じうして 'Geriatrics' が月刊誌として創刊せられたのであるが、かく同種と目される二つの学会がほとんど時処を同じくして創立せられ、しかもそれぞれ機関誌を発刊したことについては、いろいろな内部的事情もあったと考えられるが、率直に客観的に考えれば、後者の場合は臨床医学専門の機関紙として発刊せられたものと理解することができる。いずれにせよ老年研究の発展のためには慶すべきことであろう。

その後 (1944以降) 老年または老化の研究は、世界的潮流のなかに重要かつ喫緊の問題となるにつれて、少くとも欧米17ヶ国においてそれぞれ gerontological society の結成が急がれるにいたったのであるが (それら各国の研究やその機関について記述すべきであるが、紙数の

老年学 (Gerontology) の生誕

都合もあるので割愛することとする), その結成によって各国の研究の相互交流とその成果や情報の国際交換が当然企図せられねばならなくなり, 1950年にいって, ついにベルギーの Liège において国際的な会合をもつにいたったのである。現在 International Association of Gerontology として4年に1回 congress がおこなわれている¹。

実のところこの Liège での最初の会合においては, 出席者は95, 発表数は50とまだきわめて寥々たるもので, しかも発表は生物学と臨床医学に関するものがその大半を占め, 社会科学の方面の発表はわずか3篇にすぎなかったという。翌1951年つづいて第2回の総会がアメリカの St. Louis において催されたとき, 社会科学関係の部会を設置することが要望かつ提案せられ, ただちに部会の形で発表をおこなったが, それを主宰統整するような代表的人物はみあたらなかったそうである。第3回の総会は1954年に London で開かれたのであるが, そのとき総会に先立って社会科学の方面の国際的研究セミナーがもたれ, その席上ようやく心理学もふくめて社会科学の部門が成立しうることが確認宣言せられたのである。ついで1957年にイタリアの Merano と Venice において第4回総会が開催されるに先立って, 欧米両地域からえられた社会科学研究委員の会合が開かれ, 大いに討議を重ねた結果, 本総会においてはじめて社会科学部会 (Social scientific section) が成立したという話をきいている。さらに1960年の San Francisco における第5回総会においては, その応用的方面として社会福祉部会 (Social welfare section) ができたのであった (わが国はこの第5回総会にはじめて正式に参加した)。そして1963年の Copenhagen における第6回総会, さらに1966年の Wien における第7回総会と回を重ねたのであって, 参加人員は実に前者において約900人, 後者においては約1,600名を算し, 従って発表数も大量に増加して社会科学の方面だけでも前者176篇, 後者302篇となり, 実に隔世の感がある。1969年の第8回は三たびアメリカ (Washington D.C.) で, また1972年の第9回総会は大体ソ連でと予定されているが, まさに盛会の一途をたどるものと確信している。

なお附言せねばならないことは, すでに1952年よりパンフレット 'Aging' がアメリカの政府的刷局から直接発行せられていることである。これは同国 Dept. of Health, Education and Welfare によって編集せられているもので, とくに老人福祉に関する研究, 施策, 実施の情報を鳥瞰的につたえるきわめて便利なものである。最初は隔月発刊のところ, 近来は月刊となっている。さらに1961年より "Journal of Gerontology" の姉妹雑誌 'The Gerontologist'² (季刊) があたらしく刊行せられたが, その内容はいずれかといえば啓蒙的なものが多く, とくに社会科学ならびに社会福祉の分野にかぎり, 専門家のみならず一般江湖の繙読をうながすために企図せられたもののようである。

要するに国際的な研究交流はとにかくとして, つとにドイツ, イタリア, フランスなどヨーロッパ諸国において占めていた老年研究の中心は, いまやアメリカに移ったということは疑う余地はないのであって, 老年問題の社会的背景の浸透とともに, その研究や実践の盛況はまこ

老年学 (Gerontology) の生誕

とにわれわれを瞠若たらしめるものがある。本稿がさながらアメリカ中心の架筆になったことも、また止むを得ないであろう。

桑港における第5回国際老年学会総会において、はじめて社会福祉の部会を設営したことは、学会活動によって老人福祉に科学的基盤をあたえようとの意図にでたものであったにちがいはなかった。実のところアメリカにおいては、Gerontological society 主催の国内のみの年次総会をもつほか、地域的な Conference on Aging, Conference on Gerontology が随時随所で開催せられ、各地域における専門家、実際事業家そして施設従事者の研修や協議懇談をおこなっているのである。そのうちでここに特筆大書すべきことは、1961年当初におこなわれた Aging に関する大統領白聖館会議 (White House Conference on Aging)³ である。ここにいたる経緯については縷述はさけたいが、Eisenhower 大統領にとっては最後の大事蹟であったにちがいない。アメリカ各州、各地域より馳せ参じた多数の代表会衆は、³ 全国民の関心のまと将来の老人³ について20部会に分れて熱心に討議したのであった。けだし業学一体の会議ということができる。

I S C A⁴ (International Senior Citizens Association) の総会もその例にもれなかった。これが成立をみたのは1963年であり、あたかも Copenhagen で第6回国際老年学会総会が開催される機会に、この会合が同地でもたれ、約30名の専門家と各国からの老人の代表者 (日本からも8名参加) の会同によって、その成立が宣言せられた。主唱者にとっては、ここにいたるまで2年間の熟慮と協議があったというから、まさに上述の白聖館会議の熱狂のしからしめるところであったとも考えられる。世界の老人が互いに手をつないで、老人自身の要求や興味の保持と生活福祉の増進に資するとともに、生活の学習と相互の友情によって世界の文化を向上し、その改善に寄与せんとする目的をかかげたものである。第2回総会は1965年 Los Angeles において開かれ、ついで1967年にはオーストリアの Graz で第3回総会が、欧州の団体 EURAG (Europäische Arbeitsgemeinschaft für Altersselbsthilfe)⁵ と共同主催のかたちで開催せられた。なお1970年には日本 (大阪) において第4回総会が催される予定になっている。

このEURAGと称する団体は、その言葉の示すごとく、老人が自らの手で生活の途を講ずべくたちあがったもので、在来の単なる物資給与の社会的慈善事業では到底救いがたいものがあり、むしろ老人自身がその生活の途を開拓していくところに、生活の真実の幸福があるという一種の精神運動団体である。最初オーストリアの高年層団体 'Aktiver Lebensabend' とドイツの 'Lebensabendbewegung' とが1961年に相提携して運動を開始したのははじまり、これにオランダの 'Strength through Work'、イギリスの 'Sons of Rest'、スイスの 'Jewish Workshop for the Aged' を糾合し、これに Liechtenstein を加えて翌1962年に誕生したのがこのEURAGだという話である。ついでフランス、ルクセンブルグ、イタリーが参加

して、その組織は拡大強化されるとともに、ヨーロッパ一円にひろがった高年市民活動ということができる。

注

- (1) 国際老年学会総会の記録は、筆者が参加した第5回総会（1960年）以来、筆者の手許にあるので附記しておく。第5回総会の記録は‘Aging around the World’と題して、Biological, Medical and Clinical, Social and Psychological, Social Welfare と各部会ごとにまとめたもの4冊、第6回総会のは‘Age with a Future’と題して、第7回のは全体で7冊、そのうち Psychology and Social Science に関しては2冊 (Vol. VI and VII) となっている。なお後日入手した第3回総会の記録は‘Old Age in the Modern World’と題されている。
- (2) 筆者は本誌の Advisory Board に名をつらねている。
- (3) The Nation and its Older People, Report of the White House Conference of Aging, U. S. Dept. of Health, Education and Welfare, Section on Aging, 1961, なお部会ごとに background paper が作成せられている。1970年に第2回を開催する予定ということである。
- (4) ISCAについては現在のところ簡単な一枚刷の趣意書以外に文献はない。年間随時（大体季刊）会長 Borchardt 女史の執筆編集になる Newsletter を会員に配布している。この会合における日本からの参加者は第1回総会（1963年）に8名、第2回（1965年）には28名、第3回（1967年）には42名であった。筆者は3回とも顧問として随伴出席した。
- (5) EURAGについては、かねて簡単な Newsletter 様のものを通じて知っていたが、Graz における第3回総会の際発行せられた Congress Reports ‘New Problems, New Methods in Helping the Aged’ において、その結成の歴史を知ることができた。Dr. Rössel Majdan, ‘World Movement of the EURAG and ISCA in the Service of the Dignity of Older People’ はそれを詳細に紹介したものの。

4

既述のごとく欧州各国の情報については、本稿では割愛することとして、わが国の老年学の動向について考察しておく。今次の世界戦争以前の情報についてはしばらく措くとして、戦後の状況をつたえておきたいと思う。けだし老年学として研究の新幹線は、戦後においてようやく開通したのである。

昭和28年（1953年）緒方知三郎氏は‘老年病の予防と治療’の目的をもって老人病研究会を設立し、人間の寿命と健康とを保持し、老人の多年にわたる体験によって獲得された円熟した人間味と錬達された技倆とを活用して、人類の福祉増進に資するため、老人性病変の発生についてその理論と実際の研究の進展によって、その予防と治療の途を確立し、もって健康の増進と確保につとめ、ひろく社会福祉に寄与しようとの趣旨をもって、とくに唾液腺ホルモン (parotin) の研究と実験に挺身しようとした。実のところこの頃によやくわが国に gerontology という言葉がとなえだされ、筆者はいちはやく¹‘老人学’と訳した記憶がある。

老年学 (Gerontology) の生誕

翌29年(1954年)には渡辺定氏の提唱によって「人類の幸福、長寿の理想を実現するための寿命に関する総合的調査研究ならびに事業を行う」目的をもって寿命学研究会²(Gerontological Association of Japan)が結成せられ、塩田広重氏を会長として活動を開始した。そして同31年(1956年)には同研究会の年報(Annual Reports)を発刊して、同会の研究や事業について詳報するとともに、その他種々の資料を忠実かつ懇切に提供して研究者の便益をはかった(年報は1958年まで三年間続刊せられた)。さらに昭和30年(1955年)には大阪大学においても老年に関する研究の議がおこり、医学部の吉田常雄教授、同王子喜一助教授および筆者らの合議により、今村荒男名誉教授を会長として、老年科学研究会³(Osaka Gerontological Research Association)を創立し、3ヶ月ごとに研究発表会を開催することとした(現在その事務は大阪府立成人病センターに移されている)。かくして研究および情報蒐集の便宜上、上記両研究会は個別的に会長の名において国際老年学会に団体加入を申入れるとともに、研究の国際化と国内研究の相互交流と調整という建前から、全国的な総会をもつことの必要を痛感し、ついに昭和31年(1956年)に寿命学研究会主催のもとに、日本ゼロントロジー学会の名において、第1回総会を東京で開催するはこびとなったのである。総会は部会組織で開かれ、(老年)医学部会と(老年)文化科学部会と分割並列して行われた。引続き昭和32年(1957年)には大阪大学の老年科学研究会の主催によって第2回総会が、さらに翌33年(1958年)には名古屋大学が中心となって第3回総会が開催せられた。かくして総会の基礎構築も次第に強固になったので、在来の規約や会則ももたない同学同好の専門家の研究クラブ的な集会の域を脱して、明確な組織づくりに着手せんとする機運がおこり、10余名の代表者の協議によって、日本老年学会の名において学会を結成することとなった。すなわち日本老年学会(Japan Gerontological Society)は、実質的にはそれぞれ独立した二つの学会——日本老年医学会(Japan Geriatric Society)と日本老年社会科学会(Japan Socio-gerontological Society)——の連合体と称することにし、かかる組織のもとに一応会則をも制定することになったのである。会則にもとずき日本老年学会総会は昭和34年(1959年)より隔年に開催することとし、その中間年次は日本老年医学会および日本老年社会科学会がそれぞれ独自に総会を開催運営するということとした(筆者は会則起草委員となる)。かくして昭和34年および同36年(1961年)にはともに東京で第1回、第2回と総会を開き、昭和38年(1963年)の第3回は京都で、昭和40年(1965年)の第4回は仙台で、同42年(1967年)の第5回は名古屋においてそれぞれ開催せられた。ついで第6回総会は昭和44年(1969年)に大阪で開かれる予定で、その準備に着手している。最近の名古屋における第5回総会においては、参会者約800名という盛会で、発表者は医学会において約250、社会科学会24という数を示している。その他特別講演、シンポジウムをふくむこと他学会と同工異曲である。上記総会の状況や諸講演の成果については雑誌「老年病」特集号⁵、日本老年医学会雑誌などに載録されている⁶。

なお近来研究上の要請は社会の実際的要求と相まって、特に医学的側面において研究ならび

老年学 (Gerontology) の生誕

に診療の機関置設が大いにさげられるにいたり、昭和34年(1959年)には大阪府において成人病センターの開設をみたのをはじめとし、同37年(1962年)には東京大学医学部において多年懸案の老年病学教室が新設、さらに昭和42年(1967年)にいたり、京都大学医学部においても同様講座の開設をみるにいたった。その間各地公私の病院においていわゆる人間ドックが設けられつつあることも、療養機関と同時に研究の機会をあたえるものということができよう。最近また公私の大学において、社会福祉学科が設置せられるとともに、老人福祉に関する講義が必要不可欠となり、心理学や社会科学の方面からの知識を学生に提供する機会が設けられたことは、老年学や老人福祉の発展のために慶すべきことながら、またある地方では老人開発、老人教育のための公開講座を開催する大学もあるやにきいている。

なお各地の老人施設においても、その種別如何によってなんらかの研究センターをもつような動向がうかがわれるにいたったのは、近来老人福祉の実践機関が、調査研究に対する熱意を大いに示してきたことによるといわねばならないのであって、厚生省をはじめ地方官庁の所管部課、さらに民間団体としての中央ならびに地方の社会福祉協議会などの態度や行動のしからしめるところであろう。たとえば厚生省における老人福祉に関する資料の刊行や専門家をまじえた社会福祉審議会の開催、地方官庁における老人生活実態調査、とくに大阪府市における老人福祉指導センターや老人福祉研究委員会の事業、さらには全国社会福祉協議会の召集する全国老人福祉関係者会議の最近の運営などをみても、その間の消息を十分察知することができるのである。

注

- (1) 戦前におけるわが国の老年研究機関といえば、浴風園ただ一ヶ所のみということができる。浴風園は財団法人浴風会によって設立せられた老人ホームで、昭和2年2月に開園せられた。筆者がはじめて訪問したのは昭和3年、研究をはじめたのは昭和4年であった。創立直後のこととて当時まだきわめて小規模な医局において、医長尼子富士郎博士の鼓舞激励をうけた(同博士は現在なお同園の医務局長として勤務せられている)。浴風園調査研究紀要が発刊せられたのは昭和5年からで、最初は医学的研究、筆者の心理学的研究、同園保護課職員の調査など共同集録のかたちで発刊せられたが、その後医学的研究と心理学的、社会的調査研究とは別冊になり、昭和14年の頃まで続刊せられた。やがて戦果拡大とともに刊行は不可能になり、一時休刊となった。

戦後昭和23年頃からその復刊をみたが、医学的研究の成果の発表のみとなり(当時筆者は東京を去っていた)、『Acta Gerontologica Japonica』と外国名を附し、昭和42年12月にはその第46輯が刊行せられた。さらに同医局の手によって、昭和37年より毎年『老年学文献集』も編集刊行せられるにいたった。もってその活動の発展を知ることができる。なお本園の設立経過などについては、浴風園10周年記念誌(昭和10年刊)を参照されたい。

- (2) 寿命学研究会はその結成後、寿命学に関する重要な問題について研究、協議、討論の会合をもち、昭和30年までに12回をかさねた。その間理事長渡辺定博士は本会の組織運営について東奔西走の努力をかさねた。昭和31年(1956年)より年報を発刊することになり、同33年まで続刊、当時の老年問題に関する唯一の貴重な資料誌ということができる。現在本研究会は財団法人として存続し、老年、老化の問題その他関連問題について随時総合討論会などを開催し、日本老年学会の外郭団体として陰に陽に

老年学 (Gerontology) の生誕

応援している。渡辺博士は寿命学を“Biology”と称してはと考えている。

- (3) 老年科学研究会は昭和30年（1955年）4月以来、大体3ヶ月ごとに研究会を開催し、同37年まで18回の会合をもった。その後事情の変遷にともない、事務所を大阪大学から府立成人病センターに移した。
- (4) 日本ゼロントロジー学会総会の模様については、寿命学研究会年報の1957年版、1958年版に詳細である。
- (5) 雑誌『老年病』は金原出版株式会社より『老年病学』（全3巻）を出版したあと、昭和32年より刊行せられることになり、当初第2巻までは季刊、その後月刊となり、同39年（1964年）まで続刊せられた。その間第1回、第2回の日本老年学会総会の状況については、臨時特輯号に詳細に記載せられている。
- (6) 『老年病』廃刊後、日本老年医学会ではその機関誌として、日本老年医学会雑誌を編集し（南江堂発行）、第3回総会以後その状況を同誌の supplement に掲載している。
- (7) 全国老人福祉(事業)関係者会議は全国社会福祉協議会、全国養老事業協会、全国老人クラブ連合会、および開催地の社会福祉協議会、老人クラブ連合会の共催のかたちで毎年開催、その都度全国社会福祉協議会より詳細な報告書を刊行。施設関係者、老人クラブ連合会関係者、その他学識経験者の出席をもとめ、適当な研究部会を設けて発表討議をおこなっている。

5

さて上にあげたように、20世紀後半における発見は、老年学の生誕に関するかぎり、aging の概念にありとすれば、われわれはいまここに aging（老化、としをとる）とは何ぞやということをお問わねばならぬ。それはこの老化に関する精密な研究も老人福祉の実践も、それをふまえてこそ可能であるからである。勿論それは研究の結論としてみちびきだされる究極の定義づけでなければならないはずであるが、また研究を推進する作業仮説でもあると考える。筆者は自分自身の研究考察から、さらにかってアメリカにおける第2回国際学会において、What is aging? という質問に対して甲論乙駁せられた定義づけに同調して、一応次のように提言したいと思う。

≪aging とは環境の変化に対する適応性の減退、または自己を統合せんとする能力の減退をきたすことである≫

しかし、なぜかくなるかという説明原理については、現在の研究段階ではまだ確たる定説はないようで、さらに今後にもたねばならぬであろうが、現象的には次のようなことが考えられないであろうか。

aging すなわちとしをとる(老化、向老、加齢)ということは、論理的には生物一般において（ここでは人間に限定する）その誕生からはじまると考えられる。しかし現実的且つ常識的には誕生直後からとしをとる(老化がはじまる)とは決していわない。けれど aging をただちに involution, regression または degeneration と同義語と考えなくとも、evolution, progression, generation の過程として developing とか maturing といわずして aging というかぎりは、やはり生物の寿命とくに人生の後半の現象をさしていると考えなければならぬのでは

ないか。

われわれは生物の発達を考える場合、その形式が uniform なものか multiform なものか、continuous か discontinuous、か unilinear か multilinear かを考慮せねばならないが、いずれにしてもその原理本質は H. Werner にしたがって次のように考えられる。

“Development proceeds from a state of relative globality and lack of differentiation to a state of increasing differentiation and hierarchic integration”

彼はこれを orthogenic principle of development¹ と称して大いに自賛しているが、筆者もこれに同調したいと思う。これにちなんでしからば aging の過程の本質はいかに考えらるべきであろうか。発達の原理としての differentiation (分化) は必然的に integration (統合) をともなわねばならぬ。すなわち integration を前提とする differentiation でなければならぬとすれば、aging すなわち degeneration の過程は integration をともなわない differentiation であり、それは単なる segregation である。いわば desintegration による segregation の過程であると考えられよう。differentiation と integration を orthogenic organization の原理とすれば、それに対して segregation と desintegration は disorganization の原理とみることができる。J. Birren は aging organism の subsystem の変化は autonomous であるといっているのは、 subsystem の confederation が弛緩する所以であろうが、これはとりまおさず subsystem の segregation をいっているのではないか。われわれ個人の内環境である組織や器官は個人の subsystem を構成するものであり、また個人は社会の subsystem である。すなわち個人の孤立は社会的な confederation が弛緩することであり、最近の社会学的用語をつかえば、disengagement³ (社会的活動からの引退) であるとともに、社会からの segregation であるであろう。すでにとしをとるということは、それが内環境であれ外部環境であれ、その変化に対する適応が困難であり、同時に自己統合が減退するという所以は、畢竟この segregation の過程によって説明できるのではないだろうか。

注

- (1) H. Werner, *The Concept of Development from Comparative and Organismic Point of View*, *The Concept of Development*, ed. by D. B. Harris, pp.125-148, 1957.
- (2) J. B. Birren, *The Psychology of Aging*, p.22, 1964.
- (3) R. J. Havighurst, *Successful aging, Processes of Aging I*, ed. by R. H. Williams, C. Tibbitts and W. Donahue, pp. 299-320 のなかに、E. Cumming and I. Mccaffrey の *Disengagement--A Tentative Theory of Aging*, *Sociometry*, 1961 を引用している。上記両氏は中年層の activity theory に対して、老年層の disengagement theory を提言している。